

正倉院宝物 刺繍調査報告

平成12年10月23～27日と平成13年10月22～26日の延べ10日間にわたって、開封期間中の特別調査として正倉院宝物の刺繍調査を行った。調査員は、大手前大学人文学部教授の切畑健氏、日本工芸会正会員・重要無形文化財保持者の福田喜重氏、東京国立博物館学芸部法隆寺宝物室主任研究官の澤田むつ代氏、京都国立博物館学芸課工芸室長の河上繁樹氏の4氏に委嘱した(肩書は初年度のもの)。それぞれの専門とされる分野・視点からの調査を願ったが、全体の方針として、今回は技法面を重視して、正倉院を代表する刺繍について詳細に調べて、用いられている全ての繡技を明らかにすることを目指した。

正倉院には、大小合わせて200件以上の刺繍が伝わっている。中には、ほぼ完存しているものもあるが、天蓋の垂飾や幡の頭・身・身縁などの部分残片やもとの形状・用途が不明の小断片が多くを占める。小断片は、数片から数十片を集めてガラス板に挟んで整理されている。それらの多くは、天平勝宝9歳(757)5月2日の聖武天皇一周忌齋会を荘厳した羅道場幡や周縁に吉字の刺繍を施した天蓋とその部分残片であるが、献納宝物をはじめ、帯、褥、帳など、別系統のものも含まれている。

例えば、孔雀文刺繍幡身(南倉180)は、明治初期に奈良帝室博物館に頒布された後に正倉院宝庫に還納されたもので、古くから正倉院の刺繍の白眉と言われてきた。そして、昭和50年に染織品整理中の辛櫃から花喰鳥文刺繍残欠(南倉185)が発見されると、今度は両者が正倉院の刺繍の竜虎のように評され、天平期の代表的な刺繍として様々な機会に取り上げられている。しかし繡技については、どちらも刺し繡とされたり、平繡とされたり、鎖繡が施されている箇所の指摘がまちまちであったり、今でもまだ完全に解明されていない。

他の様々な刺繍についても、撚りの無い糸が用いられていることや、どのような色の糸が用いられているか、金・銀糸が使用されているか、地裂が何であるか、宝相華文、花鳥文、唐草文、蝶文、花文、花葉文、花卉文等々何の文様が表されているかということについては、従来ほぼ一貫した見解が述べられてきたと言えるが、こと繡技に限っては、いずれも解明されてい



調査風景

い。

本文の初めに述べたように、用いられている繻技の全てを明らかにすることを目指したのは、上記のような事情による。しかし、全ての繻技を明らかにすることは困難な企てであった。一つの刺繻の中で部位により様々な異なる繻技が用いられているため、それらを明らかにしようとすると、全ての部位についての繻技を調査しなくてはならないからである。長らく繻技が曖昧なままであった原因は、おそらくそこにあったのであろう。

今回の調査にあたって、切畑氏には調査全体の主導と、繻技を定めるための専門用語の確定やその用語による詳細な報告書の作成をして頂くとともに、氏の正倉院刺繻論の一端を披露して頂いた。福田氏には調査対象の刺繻の全ての部位について繻技の細かな違いを見分け、刺繻工芸作家としての経験から、どのような針使いでどのような順番に繻われたかということまで見極める労を取って頂いた。なお、調査に際しては、逐一全てについて、拡大鏡（単眼のギャラリー・スコープ）による肉眼観察と、CCDカメラによる拡大テレビ画像の観察を4人の調査員全員が同時に行い、その場で相互に意見交換をして互いに了解しながら進められた。その成果をもとにして、沢田氏には法隆寺の刺繻との比較検討を論じて頂き、河上氏には文様の視点から正倉院の刺繻の解明を進めて頂いた。

限られた時間内の調査であり、二年間で十数点だけを調査したのであるが、正倉院の代表的な刺繻はほとんど網羅しているといってよく、それらの刺繻の全ての部位の繻技を初めて明らかにすることができた。

品目No	宝物名	倉別番号	実施年度
1	繻線鞋	北倉152第1号・第2号	平成12年度
2	紫皮裁文珠玉飾刺繻羅帶残欠	中倉95	平成12年度
3	刺繻褥残欠（上記帯付属）	中倉95	平成12年度
4	間縫刺繻羅帶	中倉104	平成12年度
5	刺繻羅帶	中倉109	平成12年度
6	羅道場幡頭刺繻残片	中倉202 第72号櫃（玻璃装37号）	平成13年度
7	羅道場幡頭刺繻残片	中倉202 第85号櫃（玻璃装36号）	平成13年度
8	羅道場幡縁刺繻残片	中倉202 第108号櫃（玻璃装142号）	平成13年度
9	孔雀文刺繻幡身	南倉180 第1号	平成12年度
10	吉字刺繻飾方形天蓋残欠	南倉181 第7号	平成13年度
11	羅道場幡頭刺繻残片	南倉185 第126号櫃第125号	平成13年度
12	羅道場幡頭刺繻残片	南倉185 第128号櫃第12号	平成13年度
13	羅道場幡頭刺繻残片	南倉185 第128号櫃第152号	平成13年度
14	羅道場幡頭刺繻残片	南倉185 第128号櫃第235号	平成13年度
15	花喰鳥文刺繻残欠	南倉185 第128号櫃雑31号	平成12年度
16	花鳥文刺繻紫綾幡類残欠	南倉185 第130号櫃雑52号	平成12年度

（尾形充彦）

調査対象宝物 全姿写真および寸法

◎全姿写真の番号は本号の刺繍調査報告各篇の品目No. に共通する

1 繡線鞋（北倉152）

天平勝宝8歳（756）7月26日献物帳（屏風花氎等帳）記載品。8両中4両が伝わる。

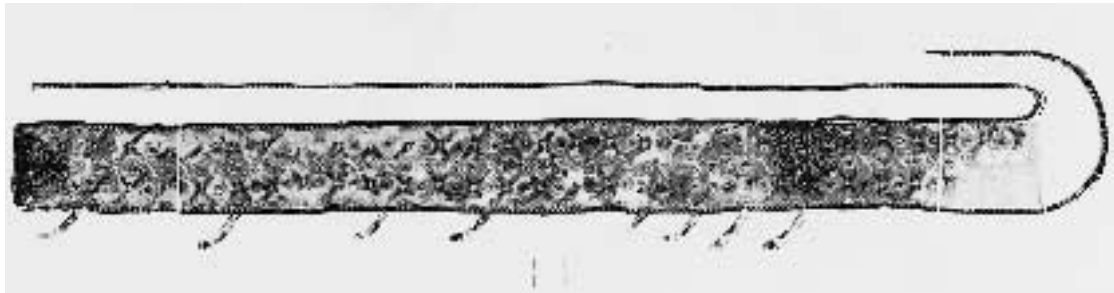
第1号 長27.5cm 幅7.6cm



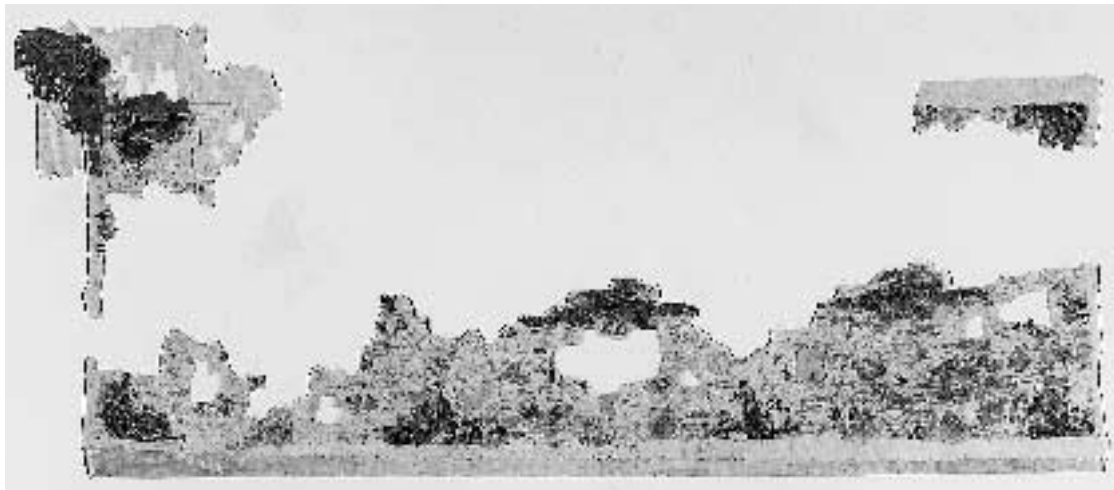
第2号 長27.6cm 幅8.2cm



2 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帶残欠（中倉95） 最長片 長85cm 幅7cm



3 刺繡裾残欠（中倉95） 2の帯に付属 長83.7cm 幅16.4cm





9 孔雀文刺繍幡身（南倉180 第1号）
縦81.2cm 横30cm

8 羅道場幡縁刺繍残片（中倉202 第108号櫃 玻璃装142号）

聖武天皇一周忌齋会用の道場幡幡身縁。
長片 長105cm 幅6.8cm 短片 縦97.8cm 幅7.8cm

5 刺繍羅帯（中倉109）

4の間縫刺繍羅帯（中倉104）と並ぶ正倉院の刺繍の帯の遺品。おそらく佩飾が付けられた帯であろう。長146 幅4cm

4 間縫刺繍羅帯（中倉104）

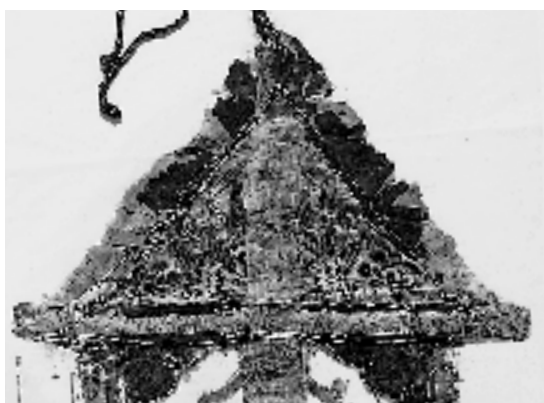
佩飾具の琥碧魚形の繫着紐に、この帯の断片が結び着けられて残る。
長260cm（4片延長） 幅4cm



6 羅道場幡 幡頭 (中倉202 第72号櫃 玻璃装37号)
幅30cm



7 羅道場幡 幡頭 (中倉202 第85号櫃 玻璃装36号)
幅29cm



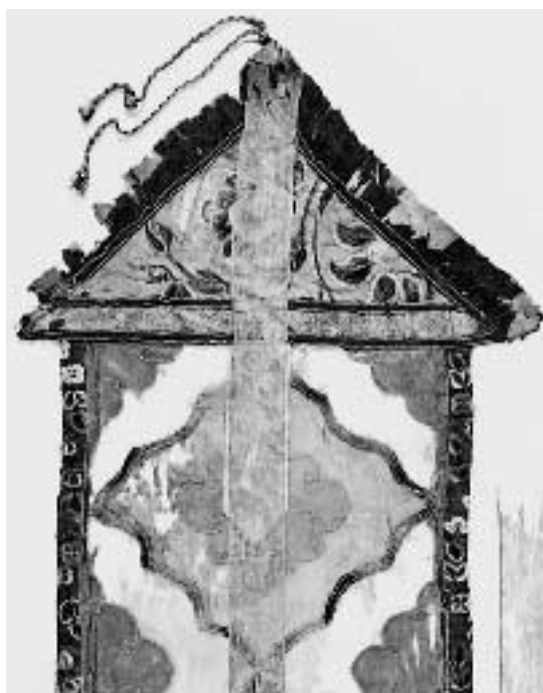
11 羅道場幡 幡頭 (南倉185 第126号櫃 第125号)
幅31cm



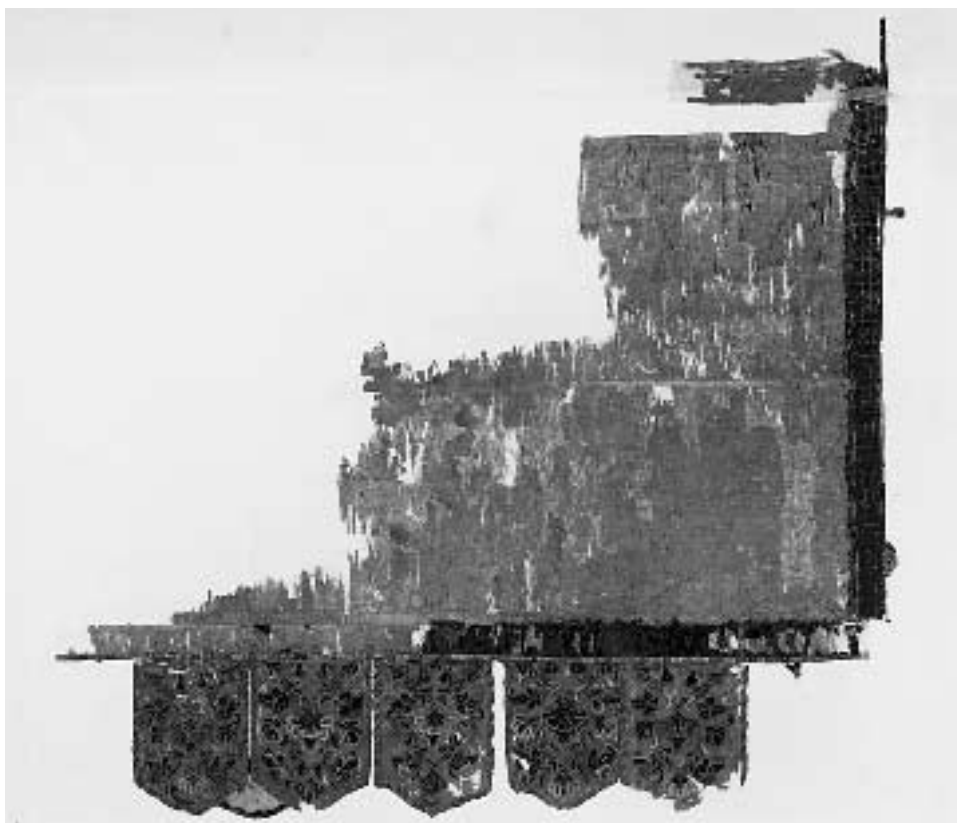
12 羅道場幡 幡頭 (南倉185 第128号櫃 第12号)
幅30cm



13 羅道場幡 幡頭 (南倉185 第128号櫃 第152号)
幅29cm



14 羅道場幡 幡頭 (南倉185 第128号櫃 第235号)
幅30cm



10 吉字刺繍飾方形天蓋残欠（南倉181 第7号）

仏や幡の上の荘厳具か人蓋として用いられたものか不明。墨書はなく、由緒不明。縦157cm 横176cm



15 花喰鳥文刺繍残欠（南倉185 第128号櫃 雑31号）

縦79.5cm 横63cm



**16 花鳥文刺繍紫綾幡類残欠
（南倉185 第130号櫃 雑52号）**

9 孔雀文刺繍幡身に繋がる幡の一部残片か。
縦29.3cm 横28cm